

異端の終末論

岩村義雄

序

本稿は、歴史的終末論を概観することにより、その性格と本質を明るみにし、異端の終末論を聖書の光の中に見ようとするものである。一般に、ヘレニズム時代におけるユダヤ民族の困難な状況が、黙示思想を産み出したと言われている。確かに、「国が始まって以来、かつてなかったほどの苦難」(ダニエル二・一)が、切迫した終末意識を育てたと言われている。確かに、バビロンの捕囚時代、黙示的終末論がユダヤ教やキリスト教会に与えた影響を無視することができないだろう。

歴史上、終末待望論者の中には、行為義認による救済と結合して、既存の教会から分派的に離脱した例がおびただしい。分派、異端は、時代の不穏な兆候を分析し、扇情的に警鐘を乱打するのである。異端として烙印をおされた例

はおびたしい。

福音書自体も「この世界に何が起るのかとおびえ、恐ろしさのあまり気を失うだろう。」(ルカ二一・26)といった形で終末を描写している。しかし、概して、悪天候や、蔓延する疫病、食糧不足の悲観的な時代には、絶え間なく終末論的フレイカリズムが現われた⁽¹⁾。神はもはや現世において民を救済せず、新天地においてのみ救いがあるという教説が頭をもたげてきた。暗転した未来像により、地平線上の終末的王国を希求するのは、様々な宗教に見いだせる⁽²⁾。

キリスト教の終末論の一つ、千年王国説をラテン語で *millenium*、ギリシヤ語で *chiliasme* という。キリスト教の異端はキリスト教的希望を持ちながら、救済論において「今すでに」「*jetz schon*」を受け入れない。異端はキリストが裁き主であると共に救い主として来ることを力説する。しかし、「いまだなお」「*noch nicht*」に力点を置いている。その結果、神の義を追求する選民のみが、千年王国に受け容れられる道が開けるといふ排他的選民思想を醸成した。教義に、選ばれた者には永遠の不死が与えられるという最終的救済の帰結がある。

終末論的 *eschatological* とは、時間上の終わりだけではなく、意味上の究極的 *ultimate* な視座をも含む。つまり終末論とは世界史に終止符を打つ時間的、空間的な最後の事柄だけではない。自己絶対化 自己義といった最後のものを神に委ねる *καρποί*「瞬間的時間」が *εσχατον βεβαίον*。

以下の論考では、今日でも跋扈する異端を三つの視点から歴史的に経路を分析し、その意味するところを考えてみたい。

一 源泉となった黙示文書

- a 死海文書の終末論
- b 地上の楽園と平和
- c 領域的な王国への待望

二 異端の自己義認

- a 千年王国説
- b 二元論の禁欲的エリート主義者
- c 中世時代の農民革命への影響

三 統一的コンプリヘンシブによる終末論

- a 「王国が来ますように」
- b 神の到来による義の宣告
- c 異端の終末論を凌駕する弁証

一 源泉となった黙示文書

- a 死海文書の終末論

メシアを待望し、古い自分と世を否定する。ファリサイ派 サドカイ派と異なるユダヤ教の分派が一世紀に存在し

た。死海写本の発見は、当時の悲観的な世を捨て、来たるべき世に生きよつとしたグループに光をあてた。エッセネ派、クムラン教団が該当する。写本の「*the psalm* 註解」には、「義の教師」に対する報い、「地を相続する」、「地に住む」が頻出している。(詩篇三七・3、9、11、22、29、34)。

「*the YAHAD* 共同体」の中で、「義なる人」と「偽りの人」の内部抗争が起きる。「義の子ら」はすべて光の王に支配され、「虚偽の子ら」は闇の天使の支配下にある。二つの対立する霊、善である光と、悪である闇の宇宙的な闘いを反映している。破滅をもたらす闇の支配者は、人類始祖以来影響力を行使してきた。「義の子らはみな光の君によって支配され、光の道を歩むが、偽りの子らはみな闇の天使によって支配される」と教えた⁽³⁾。世界が終末に近づくと、最終的審判の前にサタンは道連れにしようとする躍起になる。やがて神は介入し、メシアはサタンに勝利する。「光の子ら」を救い、繁栄に満ちた王国を相続させる。

山上の説教で、イエスは「柔和な者」が「地を相続する」と詩篇三七篇を引用している(マタイ五・5)。「*the*」⁽⁴⁾「柔和な者」とは「貧しい者」とも訳する。ヘブライ語本文に二十五回出ている。新約時代も「貧しい者」のためにイエスは福音を語った。(イザヤ六一・1、2、ルカ四・18、19)。権力のある者や、富んだ者は自分の権勢を誇り、神を侮っている。しかし、「貧しい者」は神に頼らざるを得ず、慰めや力を神から得るためにへりくだっている。「地」とは約束の地であり、神がご自分の民に与える祝福の象徴である。神が民と共に住まうことを示唆している。邪悪な者が九節で「断たれ」とあるのは、神の恵みから断絶することである。

「貧しい者」とはどんな人であるのか。

「主に望みをおき、主の道を守れ」(34節)、「無垢であらうと努め」(37節)、「平和な人」(37節)である。つまり、神の約束を信頼し、律法に従っているゆえに、神は正しい者とみなしている。

黙示思想的終末論は、古い世の終焉、廃棄である。新しい世の始まりを期待させる。

徹底した悲観主義が蔓延する時代に、超自然的な神の介入を待ち望む状況が整ってしまう。自分たちこそが、神に是認され、新しい「地」を相続すると思いたい者たちが出て来た。邪悪な者排除と自己絶対化という誘惑への誘い水にもなる。善悪二元論が底流にある。

人間である限り、個の確立という自己義認を求道する契機がある。人間は旅人のように自分の魂の純粹性を慰める主題を見出そうとする。貧しい庶民や、権益に与ることができない者たちは現体制を否定するイデオロギー、理念である終末思想に共鳴するようになる。終末待望が萌芽する糸口は自己義認と言えまいか。

b 地上の樂園と平和

黙示文書「前二世紀頃〜西暦一世紀頃」とは、世の終わりについての黙示を記した一連の文書である。黙示「覆いを取り除く」はヨハネの黙示録一章一節に由来している。外典と偽典の「第四エズラ書」、「バルクの黙示録」、「エノク書」などの一群の書による。正典では、旧約聖書のダニエル書、新約聖書の黙示録を含める。終末論を待望するセクトは、黙示文書を源泉とする熱狂主義者と見えよう。

新約聖書も黙示文書から引用する。ユダ9節「モーセの昇天」写本現存せず、ユダ14、15節「エチオピア語工ノク書一・9」⁽⁴⁾、ペテロ二・4「同一八・11以下、二〇・2、二二・1以下」⁽⁴⁾。

黙示文書の主題の多くは、世の終わりに、神の裁きがあること、人類が選別されることを記している。黙示文書の特徴に現在の苦難と、到来する樂園的な王国の二元論をあげることができる。キリスト以降のラディカルな終末運動がかかげる思想には、黙示文書的思想の継承がある。この世と未来の世という二つのアイオーンの対立である。

「しかし審判の日はこの世の終わりであり、来るべき不朽の世の始まりである。来るべき世においては朽ちはてるということがすぎ去り、罪にふけることもなくなり、不信は根絶やしにされ、義が増し、真理があらわれるのだ。」(第四エズラ書六・113~114)⁽⁵⁾。「この世」(オーラム・ハッゼ)が過ぎ去った後に、「来るべき世」(オーラム・ハッバー)が到来するのである。⁽⁶⁾「ユダとレビの部族から主の救いがあらわれ、ペリアルに戦いをいどみ、お前たちの敵に永遠の復讐をする。」(十二族長の遺訓 七男タン五・10)⁽⁷⁾。ペリアルは支配下にある古い世は過ぎ去る。ペリアルである悪魔は「この世の神」(コリント四・4)⁽⁸⁾である。破局が近い時に、神は「滅びの群」massa perditionisの根本に斧を置く(マタイ三・10)。敬虔な者と不信仰な者が、羊とやぎのように分けられる。「主権を持ちたもう主よ……生きてあなたのいましめを守る者は何と幸いなことでしょう。……義しい者の数は多くはなく、むしろくわすかであり、一方不敬虔なものはおびただしくいる。」(第四エズラ書六・45、50)⁽⁹⁾。「この世」は神の主権に敵対するサタンの支配下とみなす。新しい「天と地」の前に、神は未曾有の裁きをくだす。ノアの洪水の時と同様に、選ばれた者だけが通過するという思想である。選ばれた者は、ギリシア思想や、グノーシス主義のよつな霊的存在ではない。アダムが喪失した身体的完全さの回復である。宇宙の最高主権者は、来たるべき世に、戦争、病気、貧困、不幸に終止符を打つ。新しい世は祝福、喜び、平和、健康、不老不死で満ちている。新しい世が始まる時、死者はよみがえる。「大地は地中に眠る人々を地上に返し、塵はその中に黙して住んでいる人々を戻し、陰府の部屋はそこに預けられていた魂を外に出す」⁽¹⁰⁾。「生殖も増殖もない」世になり、人口爆発、食糧不足はない⁽¹¹⁾。第七日目の千年期に「神はこれを見て、良しとされた」という創造が完成する⁽¹²⁾。エデンの園は、ペルシャ語の「園、公園」から由来した語である⁽¹³⁾。「あなたたちには楽園が開かれており、生命の木が植えられ、来るべき時が備えられて、豊かな富が用意されており、都が建てられ、安らぎが保証されており、恵みが全きものとなり、完全な知恵が与えられる。悪の根は、あなたたちに近づかないように封じられ、病は消え去り、死は姿を隠し……」⁽¹⁴⁾。地上の楽園で永遠の命を享受できる展望が黙示文書に書かれている。

黙示文書の思弁は後期ユダヤ教、キリスト教会に影響を少なからず与えた。神に敵対する世と、未来の世という二つのアイオンの二元論的発想はペルシャの終末論の影響である。⁽¹⁵⁾

黙示文書の二元論的思惟は、形而上学的、独立した思弁的教えではない。常に歴史的、時間的、宇宙的、黙示的視点である。つまり黙示文書的思想は、この世と未来の世という二つのアイオンの連続を認めない。時間的に分離するのである。「この世」を变革したり、住みやすい環境作りに貢献する意欲は当然持ち合わせない。今の世界の破棄を望むからである。滅び行く体制には魅力がない。したがって、世界の大転換を願う者は黙示文書の期待を歓迎するだろう。新天新地をもたらす神の意志を中心とした生活が救いにつながると思われる。神が介入し、歴史に審判をくだすまでの忍耐を甘受する。「不法がはびこるので、多くの人の愛が冷える。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」(マタイ二四・12~13)。

後期ユダヤ教の神学では、神の国が現われる という願いが純粹に終末論的な概念になった⁽¹⁶⁾。

c 領域的な王国への待望

異端の軌跡を辿ると、「この世」を否定し、「神の国」を待ち望む教理が伴う。旧約聖書に「王国」という言葉はあるが、「神の国」という表現はない。直訳すれば「神の王国」である。ヘブライ語 מְלָכָה「神の王国」に相当するアラム語は מְלָכְתָּא「王国」である。マルクスの語源は「統治する、王となる」である。「王的支配」の概念を表すマラフは出エジプト記一五章一八節に初めて出てくる。「わたしの王」神(詩篇一四五・1)は神

の今の統治を表している。メレフは政治権力、王権、権能であることが原義である。抽象名詞マルクトはメレフから派生し、神の支配、統治が本来の語義である⁽¹⁷⁾。したがってマルクトを「王権」と訳したりする。(サムエル上二〇・31)。アラム語の王国の五十七箇所の中で、空間的な領域の概念はわずかにすぎない。

異邦諸国民からの圧制、「悪い教師」、「偽りの預言者」が跳梁する時代は神を見失つ。神の王的支配に不信仰となりやすい。黙示文書の思弁は「神の支配」という現実的なりアリティーを否定する。「神の統治」の空間的、時間的成就を切望し、隠遁の共同生活を始めたります。

死海写本の発見にしがって、エッセネ派の詳細な入会手続きが判明した。「宗教要覽」は、一年の入会儀式や食事規定、結婚を禁止し、養子によって種族の延命を図るなど禁欲に徹していた⁽¹⁸⁾。エッセネ派が厳しい戒律に耐えることができたのは、「この世」を拒絶し、「新しい王国」に希望を託していたからである。

黙示文書の旧約ダニエル書は王国の到来を預言している。黙示終末論者が領域の用法で頻用する箇所がある。「天の神は永久に亡びない一つの王国を起さされるでしょう。その王国の支配は他の民に渡されることはありません。その支配はこれらの他のすべての王国を打ち砕き、これらを終わらせ、自分自身は永遠まで続くでしょう。」(ダニエル二・44)⁽¹⁹⁾。新しいアイオンが古いアイオンに取って代わる典拠とする。しかし、ダニエル四章31節の王国はまったく相反する。「わたしはいと高き神をたたえ、永遠に生きるお方をほめたたえた。その支配は永遠に続きその国は代々に及ぶ」。享受している「神の支配」の永遠性、連続性を宣言している。現在「神の統治」が今すでに確立している。民は目下統治しておられる神に賛美、感謝、喜びを表明をしていたのである。

したがって、聖書には「神の支配」は、「いまだなお」noch nicht ja、「今すでに」jetzt schonがある。二つの概念は対立的命題ではない。二律背反でもない。統一的コンプリヘンシフに把握しなければならぬ。

ファリサイ派はメシア待望という強い民族意識があった。政治的な方法で神の介入があることを信じ、民衆に説いていた。ファリサイ人はイエスの真のメシア性・到来・支配を拒絶した。Bartelmeは将来の実現であって、現在の作用範囲内とは認識していなかった。黙示文書の関心は、新しいアイオンの開始の時点に集中していた。ファリサイ人は「神のバシレイアはいつ来るのか」とイエスに回答を迫った。イエスの答え方はまず否定から始まった。「バシレイアは、見える形では来ない」、『』に『』にある『』と『』と言えるものでもない。一番目に、時間的に、次に空間的な「神の支配」の到来を打ち消した。黙示思想終末論者は、一五三三年、一八四三年、一九一四年、一九七五年などに、時間的・空間的な再臨待望を熱狂的に展開した⁽²⁰⁾。黙示文書の思弁は「いまだなお」を一義的に解釈する傾向がある。「実に、神の国はetvno juonであるのだ」を半面的にとらえてはいけない。平衡の取れた視座 統一的コンプリヘンシフで釈義すればよい。テルトゥリアヌスは正統と異端を見分ける基準の定式を確立した。『マルキオン反論』の中で註解している⁽²¹⁾。ヒュモンは問答の相手の「ファリサイ人の」に適用。「神の国」は「ファリサイ人のエントス」で「今すでに」始まっていると解した。つまりバシレイアは将来のことではなく、「今すでに」影響を及ぼしていると説明した。

神が、主権者として永遠不変に「今すでに」統治・支配しているなら、メシアの来臨・再臨は不要なのか。否。キリストの贖いによって不義なる者の義認*justificatio iniusti*が初めて確立することになる。

一般的に、イスラエルの民のバビロン捕囚の期間に、黙示思想の芽生えを辿ることができよう。バビロンから帰還した民は、神である「人の子」の登場を熱望した。「主の日」の幕開け、王の即位までの緊張感を持続しながら、終末思想を展開していった。イエスの時代には、「ダビデの倒れた家」(アモス九・11)の再建を望む信仰姿勢が、敬虔なユダヤ人の動機の座に位置していた。

イザヤ書には、新しい義の時代を待ち望む描写がある。「終わりの日のシオンへの帰還」(イザヤ二・1~5)、「エッサイの株の若枝、狼と小羊の共生」(同二・1~9)、「シオンへの大路」(同三五・1~10)、「インマヌエルの誕生」(同七・10~17)、「みどりごは力ある神」(同九・1~6)などは、王の像として神秘的にエスカトンに投影されていた⁽²²⁾。

注目すべきは、「神の到来」の預言である。「悪に報いる神」救済者の現出が前方に控えている。「悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる」(イザヤ三五・4)。

一 異端の自己義認

a 千年王国説 Millennium

黙示文書は、序章的な裁きの後にメシアが千年間新しいアイオンを支配すると述べる。「千年」は黙示録二〇章2~7節だけにしか出てこない。ユダヤ教では西暦九十年頃の記録がもっとも古い⁽²³⁾。黙示文書の中には、四百年の期間と不定期間が存続する場合もある⁽²⁴⁾。

千年王国論は終末論の一形態である。premillenarianism「前千年王国説」、postmillenarianism「後千年王国説」、amillenarianism「無千年王国説」の三つのタイプがある。前千年王国説の信奉者の中からラディカルな再臨待望が生まれやすい。前千年王国説を異端の範疇に入れるかどうかは、「異端」の定義⁽²⁵⁾に左右される。

「異端」と前千年王国説を同列に論じることが可能だろうか。

一九七八年十一月後半、ジム・ジョーンズは、南米のガイアナの九十二名の集団自殺の指導者である。「地上に築くことのできる最良の天国」と称し、前千年王国説の橋頭堡を築いた。出発点は一九五六年に旗揚げした米国インディアナ州のペンテコステ教会であった。つまり既存の宗教を起点とする分派である。ジョーンズは黙示文書に傾倒し、夢想した。核戦争の脅威を訴え、教会を安全圏に移転することまでもした。ハルマゲドンを妄想症的、誇大妄想的に解釈したのは、オウム真理教の麻原彰晃と同根であろう⁽²⁶⁾。麻原は「世の終わり」を演出した。一九九五年三月二一日、東京地下鉄サリン事件によって十一名が死亡、五千名近くが被害を受けた。

終末の時が迫りつつあるという切迫感は現実からの離脱を促進した。グルの提示するラディカルな前千年王国説の夢に陶醉した。二例は教条主義的な聖書主義というより神秘主義的傾向が強かったと言える。霊的熱狂主義者にとって前千年王国説の旗印は奏効した。

千年王国説を支持した初代教父ユスティヌス「一〇〇頃~一六五頃」、エイレナイオス「一三〇頃~二〇〇頃」とモンタノス派「?~一七九以前」⁽²⁷⁾を比較してみよう。モンタノス運動は正統派から異端宣告を受けた。一方、リヨンの司教であったエイレナイオスや、ユスティヌス、ラクタンティウス「二四〇頃~三二〇/三三〇頃」たちは至福千年説を主張しても批判を受けなかった。どうしてモンタノス派が異端として烙印を受けたのか。「間違った神学」を唱道したことが原因なのか。神学とは信仰の理性的解釈の試みだと定義しよう。すると、聖書解釈が信仰的・キリスト論的規範から逸脱した場合、「間違った神学」となる⁽²⁸⁾。

三位一体の教説を初めて明言したテルトゥリアヌス「一五〇/一六〇~二二〇以降」に注視したい。テルトゥリアヌスはラテン神学の基礎を造った神学者である。テルトゥリアヌスは二〇七年頃モンタノス主義の運動に参与した。道徳的な厳格さに魅了され、聖霊運動に走ったにすぎない。「間違った神学」を唱えたわけではない。しかし、カト

リック教会は、テルトゥリアヌスを異端として排斥した。厳密には、「教会によって教えられている教理を拒絶することによって始まる。神の権威に対する従順は教会の教えに対する同意を要求する。教会の信仰の規準よりも個人が選んだ所説を重視するのが異端である」の判断が働いたのだらう⁽²⁹⁾。つまり歴史的過程の中では教会会議が正統と異端の峻別に大きな役割を果たしてきた⁽³⁰⁾。

では、エイレナイオスたちが前千年王国説を支持しても、教会から弾圧を受けなかったのはなぜか。一つに、当時はまだ「前千年王国説」「後千年王国説」「無千年王国説」の取捨選択のための体系づけた論議がなされていなかったからである。二つ目に、エイレナイオスたちはキリストの再臨の日を特定しなかったことである。三つ目に、自己義認を主張せず、禁欲主義的エリートとして排他的ではなかったことが挙げられる。したがって、当時、人々は前千年王国説支持者に偏見を抱かなかった。

三世紀の神学者オリゲネスは、「無千年王国説」の立場であり、前千年王国説を否定した。アウグスティヌス「三五四〜四三〇」も、未来の千年王国を推論にすぎないと斥けた。前千年王国説を唱えたドナティスト Donatiani vel Donatistae たちを「肉的な人々」と糾弾した⁽³¹⁾。教会がキリストの王国であると説いた。千年期は地上における教会が勝利する歴史の全期間と同一であると論及した⁽³²⁾。つまり黙示録の「千年」を象徴的な数字と解釈する。アウグスティヌスは「神の国」「教会」「黙示文書の千年期観」に関する神学的思考の基礎を構築する上で方向性を定めた。「無千年王国説」が中世以降の正統的な教義、カトリック教会の公認の教えとなった。アウグスティヌスの死後エフエソス公会議「四三二年」では、前千年王国説が「迷信」として否認されている。「無千年王国説」「後千年王国説」の歴史的趣向は、ラディカルな再臨や、社会変革を望まない体質にした。

アウグスティヌスは、七十五歳頃に「もろもろの異端について」De haeresibus を執筆した。八十八の異端を分析した。アウグスティヌス自身は十九歳でマニ教に没頭し、九年後にキリスト教に再び復帰した経緯がある⁽³³⁾。アウグスティヌスは本稿に欠漏できない経歴、客観的な洞察力がある神学者である。自己義認の権化と言われるペラギウス主義に対する論駁も示唆に富んでいる。

b 二元論の禁欲的エリート主義者

黙示文書の影響を受けた者たちは神の義を固定的に解する。矛盾に満ちた古い世に、神の裁きがくだる。エスカトンの時の神の審判行為は不法と邪悪に終止符を打つ。忠実な者たちの救出と義認、他方では邪悪な者たちに報復的な処罰を行使する。今の体制への不満、焦燥、憎悪を解消してくれる。しかしながら、現在までは悪が許されてきた。オリゲネス「一八五頃〜二五四頃」は神の裁きが速やかに実現しない理由を、神の忍耐と罪への猶予だと考えた。

ペラギウス「三六〇頃〜四二〇頃」は、オリゲネスに追隨した。「神の怒り(オルゲー)」とわたしたちが呼ぶものは、神の感情(パトス)のことではなく、非常に重大な罪を犯した人々に対して、より厳格な方法による教育の目的のために用いられる何かである。⁽³⁴⁾ 罪人に悔悛の猶予の期間を与えるために、神はすぐに審判をくださない積義を継承した。人は自ら良い行ないの蓄積によって、最終的に義と認められると教えた。国教化政策によって、教会が生まれるくなり、退廃した道德をペラギウスは憂えた。「名前だけのキリスト者」⁽³⁵⁾で形骸化した教会を酷評した。特に矛先は聖職者に向けられた。弱者の立場に対する権威主義、抑圧に対決した。ローマで、信徒集団の指導者になった。「道德的完成は人間にとって可能である」と力説した⁽³⁶⁾。禁欲生活を奨励し、聖者として評判が高まった。教養のある異教徒や、多くの信奉者から称賛された。ペラギウスは神の恩恵による律法と自由意志を強調した。神は人間に不可能なことを強要するはずはないと考えた。自発的な愛によって、神の義を実践する神人協力説(Synergia)の草分

けとなった。ペラギウス派は禁欲的エリート主義の様相を帯びていた。

一八六三年、エレン・ホワイト「ウィリアム・ミラーの後継者」は宇宙論争を説いた⁽³⁷⁾。神とサタンの宇宙的闘争歴史に終止符を打つために神の民を選ぶという。善悪闘争史的三元構造の教理を教える。キリストの共同の相続人として忠誠を保つために殉教も厭わない。キリストの義を重んじるからである。アドベント派の教理によって基礎を作ったエホバの証人も同様の見解を浸透させる。モンタノス運動、中世の千年王国運動、十九世紀以降のラディカルな再臨運動に共通しているのは、キリストの模範に倣う行為義認であろう。黙示文書的な応報思想が水脈のように受け継がれている。

ペラギウスの著書には「模範 (exemplum)」、「模倣する (imitari)」の概念が反復する。『聖パウロの手紙注解』Commentarii in epistulas S. Pauli の中だけでも二百以上出ている。最初のアダムの罪性ではなく、キリストの模範、信仰の完成者（ヘブライー二・二）に倣うことが、世に勝利する道と強調した⁽³⁸⁾。アウグスティヌスは、「神の恩恵がわたしたちの功績に応じて与えられるということを証明しようと努力を集中するのです」と、ペラギウスの功績主義、禁欲主義を論駁した⁽³⁹⁾。アウグスティヌスは強弁した。キリストの模範に倣うことによって義とされるのではない。神は罪人を赦免する。たとえ功績がなくても、無条件で義と認める。キリストへの「信仰のみ」が義認をもたらすという神学的核心が歴史的キリスト教会に定着するようになった。

歴史的なアイロニーを垣間見る気がする。法律を学んだペラギウスは四年ほどで修道士になり、博学であった。人々からの信頼を勝ち得る人格者であった。一方、アウグスティヌスは三十年近くにわたって、放蕩三昧、不道德な生活、二元論のマニ教に身を置いた末、キリストが上から介入、神に実存的に回心した。アウグスティヌスが「恩恵の博士」、doctor gratiae と称されるが、かつては「罪の博士」であった。だからこそ福音主義的教会思想の父祖になる

ことができた。一方、道徳的改革者ペラギウスは異端者として教会から退けられた。

意外にも、ペラギウスは、「キリストの模範に従うことを可能にするのは、神からの賜物」と言及していた⁽⁴⁰⁾。ペラギウスの救済論の根底にある立論が、善悪二元論闘争歴史観にあることを看破すべきである。神に選ばれていないのに選ばれたと思ひこんでいる者たちと、神に選ばれていなかったのに神に選ばれる者たちの対立の構図である。西暦一―二世紀の小アジアのケリントス Cerintus から始まった善悪二元論闘争歴史観の通性がある。

二元論は革命的な力をもっている。この世が不正であるという思想が支配的になる⁽⁴¹⁾。必然的に他者排除と自己絶対化という主観主義的な形態へ変貌していく。狂信的なほどに反社会的なスタンスをとるか、それともまったくアンキーの無関心が顕在化し、社会生活から遊離するようになる。「世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです。」(ヨハネ一七・14)と、現体制との非妥協の生活を維持する。個々の成員は理想を具現化するために強固な信念、緊張、忍耐を要しなければならなくなる。

c 中世時代の農民革命への影響

十一世紀以降の時代、欧州は十字軍派兵、農民一揆、疫病などによって疲弊した環境が生じた。小作農民、不熟練職人など下層階級の人々の間に、終末思想が台頭した。平静の時代には顕在化しない黙示文書の終末論、再臨待望が地下水から噴出するように湧き出てきた⁽⁴²⁾。カトリック教会は、アウグスティヌスの「無千年王国説」以外を容認しなかった。宗教改革以降のルター派教会、改革派教会も「無千年王国説」を継承し、楽観的な展望を持つ傾向が強かった。

十六世紀、ヨーロッパで抑圧された農民、日増しに地位が低くなった職人達は終末の夢に狂奔した。「貧しい人々

は、幸いである。神の国はあなたがたのものである」⁽⁴³⁾と信じた。ラディカルなイデオロギーである千年王国論が清廉無私の下層民の心を捉えた。黙示録に示された終末の時が迫りつつあるという切迫感は現実からの離脱を促進した。既存のキリスト教会の腐敗墮落、僧職者の行状などへの批判が続出した。

終末史を何かある終局史と取り違える誘惑に陥る兆候が欧州で発生した。

一五二五年四月、トマス・ミュンツァー「一四九〇頃～一五二五」が率いる貧農たちは暴動を起こした。ドイツ史が経験した最初かつ最大の農民蜂起となった。

一五二三年、ルターは「この世の権威について、人はどの程度までこれに対し服従の義務があるのか」を発題した。その中で、農民たちに理不尽な君主の命に対しても無抵抗を呼びかけた⁽⁴⁴⁾。ルターは国家権力に対して盲目的服従を決して要求したのではない。農民だけにでなく、諸侯に対しても激しい言葉で諫言している⁽⁴⁵⁾。ミュンツァーは少数選民による社会変革、間近な終末とキリスト再臨への期待などをもって公然とルター批判を展開した。「領主たちは、貧しい者たちに戒めを広めようとして、神は汝盗むなかれと命じた」という。しかし、それは無益で、かえって貧しい農夫、職人、すべての者を苦しめ、恥かしめる原因となっている⁽⁴⁶⁾。

ミュンツァーも、神のみ業によって信仰に至り、神のみが恩寵を保証していることは認める。しかし、律法そのものが、すでに、恩寵であり、義認であった⁽⁴⁷⁾。

神に敵対する世と、未来の世という二つのアイオンが激突した。ミュンツァーたちは、「この世」(オーラム・ハツゼ)の改革ではなく、この世そのもののトータルな否定を叫んだ。キリストへの信仰によって、義と認められる順序を倒錯するところに黙示思想の温床があるだろう。整合性のためにラディカル終末論思想と混成したのである。反社会的な常軌を逸したムーブメント、マインド・コントロールの犠牲者という発信内容の皮相だけでは異端の本質

を把握できないだろう⁽⁴⁸⁾。分派・異端のグループの教祖、指導者たちの「神の義」の神学体系の分析、検証を通して、位相を提示しなければならぬ。

モンタノス派、ペラギウス派、ミュンツァー、十九世紀初頭のセプンステー・バプテスト、末日聖徒イエス・キリスト教会、エホバの証人も行為義認の厳格さに関して軌を一にする。黙示文書の義の理解が、「自分の義」(ローマ一〇・三)を一義的に追求する起因となったのである。義「善行」が救済につながり、不義「悪行」によって処罰を受ける二元論である。「主権をもちたまふ主よ。……わたしを他の多くの者よりも義しい者とお考えくださるのでしたら」⁽⁴⁹⁾にあるように、神の義の概念に、裁判者としての神観を抱いている。

ルターもカルヴァンも律法の対極であるキリストに対する「信仰のみ」*sola fide in solo Christo*を教示した。信仰義化を受けた者が、キリストの統治する王国 *Königreich*を相続する。

二 統一的コンプリヘンシブによる終末論

a 「王国が来ますよつひ」

イエスの説教の「神の国」の中に、神の支配の現在性と未来性がある。*Jetzt schon-noch nicht*の局面と言える。ノルマンディ上陸作戦「一九四四年」の表現がわかりやすい。「Dナイ」の侵攻は、最終的かつ完全な、現実の勝利の瞬間である。「Vナイ」に先だって起「らねばならなかった。キリストの死と復活はDナイであり、再臨と最後の審判はVナイのようなものである」⁽⁵⁰⁾。統一的コンプリヘンシブに通釈することによって、平衡のとれた終末論を把握

できるだろう。

しかし、わたしが神の霊で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ（マタイ二・28）は現在性の聖句である。一方、「もし片方の目があなたをつまずかせるなら、えぐり出さない。両方の目がそろったまま地獄に投げ込まれるよりは、一つの目になっても神の国に入る方がよい」（マルコ九・47）は未来性に属する。では、イエスが「神の国は近づいた」「御国が来ます」と述べた真意はどちらか。黙示思想の延長上の「来るべき世」（オーラム・ハッパー）に相当するのだろうか。

福音書の主の祈りに「御国が来ますように」「*ἵνα ἔλθῃ ἡ βασιλεία σου*」がある。（マタイ六・10）⁽⁵¹⁾。しかし、旧約聖書に、「王国」が「来る」の用法はない。常に「王が統治する、支配する」という表現である。聖書の王国は民主主義の国家の形態とは異なる。キリストが宣教した Kingdom とは何であったのか⁽⁵²⁾。

マタイの福音書には「天の国」が三十三回、「神の国」は四回出て来る。「王国」とは「支配」「つまり」「王権支配」が原義である。

マタイ五章には、*ἡ βασιλεία τοῦ θεοῦ*「神の王権支配」が出て来ない。*ἡ βασιλεία τοῦ οὐρανοῦ*「天の王権支配」である。マタイは「神」という直接表現を避けた。「天」と言い換えたのはユダヤ教的な用法にすぎない。当時ラビたちは *רובי קריבים* の言葉を用いて、ユダヤ人に今すぐに神支配のくびきを負うように勧めていた⁽⁵³⁾。

キリストの弟子は「主の祈り」をイエスから直接学んだ。聞いた者はすべてユダヤ人であった。唯一神信仰のユダヤ人は、キリストに出会うまでに親しんだ祈り方や、賛美があったはずである。「カッディシユの祈り」はシナコークで礼拝の説教の終わりに常に捧げられていた。イエスの意図を了知するには必須知識であろう。

「彼の偉大な名が、

この世界において偉大とされ、

また聖別されますように、彼が御意志に従って

創造なされたこの世界において。

彼は彼の王支配を、あなた達の生活とあなた達の日々と

イスラエルの全家の生活においておこなわせられますように、

速やかに、そして近い将来に。」⁽⁵⁴⁾

イエスと同時代の人は、この祈りをすぐに想起したにちがいない。意味を即座に消化しただろう⁽⁵⁵⁾。「カッディシユの祈り」は、神支配が速やかに来るように祈願する祈りである。したがって、厳密には、「御国が来ますように」「ご支配が世に行きわたりますように」の訳出も可能である⁽⁵⁶⁾。

b 神の到来による義の宣告

イエスは、シナコークでイザヤの巻物から教えた。（ルカ四・15〜19、イザヤ六一・1〜2）。「雄々しくあれ、恐れるな。見よ、あなたたちの神を。敵を打ち、悪に報いる神が来られる。神は来て、あなたたちを救われる。そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。そのとき歩けなかった人が鹿のように躍り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う。」（イザヤ三三・4〜6）。

エルサレム・タルムードのタアニート項に出て来る祈りは近似性がある。「あなたの名が高められ、聖ならしめられ、たたえられよかし、われらの王よ、あなたが送って下さるあらゆる雨粒のゆえに」（PT Taanit 64b）。待ちに待った雨が天から降ってきた。「王」のみ名と統治に感謝する祈りが常であった。弟子たちは、「主の祈り」の「み国」を

救済論的に「神の支配」と受け止めていただろう。

「天の国」は死後の「天国」を意味するのではない。神が樹立する未来の来たるべき「千年王国」のことだろうか。黙示思想的終末論者は、「御国が来ますよつに」をラティカルな期待の一因とする。「古いアイオン」が滅ぼされた後に到来する「新しいアイオン」と一義的に解釈する。「主の祈り」をエスカトンの切迫性の角度からだけで判読するのは近視眼的である（ペテロ一・〇）。「コンキリストs」(あなたの「御国」に着眼すべきである。「あなた」とは「王」支配者を指している。つまり、「今おられ、かつておられ、やがて来られる方」(黙示録一・八)であるう。「やがて来られる方」として「主イエスよ、来てください」(黙示録二一・20)とヨハネは期待した。歴史の始まりであり、歴史の終わりであり、その間に現臨する万物の支配者が、歴史に介入する。永遠なる方が、パンを裂く礼拝の「時間」の中にも臨在する。感謝、喜び、賛美の霊的な犠牲の瞬間である。時間の中に存在するこの世界の意味として起こるべきであったところのことは、「この出来事の中で起こった。……すべての人間も……この終わりの日に生きている」と言えよう⁽⁵⁷⁾。最後の日は *et incho* に到来した。最後の日は途上であって、あとは経過し、終了するだけなのである。

「御国が来ますよつに」の真意は「まことの神」であり、「まことの人」である方の支配権が今も、未来永劫にわたって行使されることへの懇願であるう。「王」のイメージに、疎遠の概念は含まれていない。「彼が世界よりいかに高くはなれていたにせよ、人がシナゴグに入って、柱の陰の（人目につかないところに）立って小声で祈りをささやいただけでも、ほむべき聖なるお方はその祈りを聴いてくださる。口が耳に近く同じくらいに被造物にこれほどに近くなります神がほかにあるだろうか」(PTラホート13a)⁽⁵⁸⁾。

したがって、「主の祈り」はメシアの支配がすでに「実現し」まだ「完成していない」ことを感謝、賛美しつつ、「御国が来ますよつに」の真意は「まことの神」であり、「まことの人」である方の支配権が今も、未来永劫にわたって行使されることへの懇願であるう。「王」のイメージに、疎遠の概念は含まれていない。「彼が世界よりいかに高くはなれていたにせよ、人がシナゴグに入って、柱の陰の（人目につかないところに）立って小声で祈りをささやいただけでも、ほむべき聖なるお方はその祈りを聴いてくださる。口が耳に近く同じくらいに被造物にこれほどに近くなります神がほかにあるだろうか」(PTラホート13a)⁽⁵⁸⁾。

したがって、「主の祈り」はメシアの支配がすでに「実現し」まだ「完成していない」ことを感謝、賛美しつつ、「御国が来ますよつに」の真意は「まことの神」であり、「まことの人」である方の支配権が今も、未来永劫にわたって行使されることへの懇願であるう。「王」のイメージに、疎遠の概念は含まれていない。「彼が世界よりいかに高くはなれていたにせよ、人がシナゴグに入って、柱の陰の（人目につかないところに）立って小声で祈りをささやいただけでも、ほむべき聖なるお方はその祈りを聴いてくださる。口が耳に近く同じくらいに被造物にこれほどに近くなります神がほかにあるだろうか」(PTラホート13a)⁽⁵⁸⁾。

つ、嘆願する内容である。礼拝の中で、とりわけ聖餐式で、「ご支配が世に行きわたりますよつに」とは現臨に注視し、終末論的実存を体験している。つまり、キリストの弟子たちも一世紀に始まった王権「支配」を力強く告白してきたのである。

キリストは追隨者に「王国」と「義」を求めるよつにと勧めた(マタイ六・33)。

「*δικαιοσύνη*」義 (righteousness) に関して「ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、……彼を信じよつとしなかった。」(マタイ二一・32)と書かれている。報酬的思想ではなく、神の恩恵の視座から義をとらえる必要がある。福音書に「義」の登場は少ない⁽⁵⁹⁾。ツエタカーの原義は、「救い」の概念である⁽⁶⁰⁾。いわば同義語的である。「わたしはわが救「ツエタカー」を近づかせるゆえ、その来ることは遠くない。わが救はおそくない。わたしは救をシオンに与え、わが栄光をイスラエルに与える。」(イザヤ四六・13 口語訳)。パウロは、「救いの日にあなたを助けた」(イザヤ四九・8)を、「今こそ救いの日」(コリント六・2)と解釈した。新約の救済は、神の意志としての「神の国」であり、「義」である⁽⁶¹⁾。

不義者が義と宣告されるのは、人間の法規定を超越する。神の義、つまり救済行為が恩恵として機能するからである。ツエタカーは「救い、恵みの業」を含蓄する。個人が求める「義」も、「救い」と考えるなら、異端に見られる自己義認や硬直した教義、地平線上の神の千年王国を希求する急進的な終末論は生まれないう。福音 Good News とは、終末論的「神の王国」が、今すでに義の形をとって到来している宣言である。

c 異端の終末論を凌駕する弁証

十九世紀以降、アルベルト・シュヴァイツァーが「神の王国」の到来を徹底させる終末論⁽⁶¹⁾を掲げた。一方、ブ

ルトマンは実存的現在終末論⁽⁶²⁾を主張した。キリスト教会は、二極の終末論の間を往来する振り子のように傾く思惟からいまだに脱却できないでいる。キリスト教的終末論は、未来学やマルクスのイデオロギーの収斂に翻弄されるようになった。そこでパネンベルクやモルトマンは、宇宙論の角度から論及しつつ、社会変革、倫理向上に貢献する面を唱える。

ウァイスの「超越的」、シユヴァイツァーの「徹底的」から始まった終末論理解は、今世紀になって、ドッドの「実現された」、バルトの「危機」、クルマンの「歴史感覚」、フルトマンの「実存的」、パネンベルクの「啓示としての歴史」、モルトマンの「希望」、ティヤール・ド・シャルダンの「進化」などを繰り広げた。どの終末論も、貧しく疲弊した者の目からは哲学的思弁のパラダイムに拘束されすぎてはいないか。一方、異端は黙示的三元論に基づく聖書からの単純な預言を語りだした。間隙を縫うかのように黙示的終末論が闊歩する様相を提供してしまった。

異端は、古いアイオンが破滅し、新しいアイオンが起こされる直前の表象によって平静さを喪失する。天変地異、貧困、エイズ、圧制、腐敗などの素材に過敏になり、黙示録のハルマゲドン接近に備えて、コロニーなどに共同生活するようになる。共生する仲間だけによる禁欲的エリート主義に自己満足する。自己義を絶対化する。

しかし、不穏な時代であつても、神の義=救済を待つべきである。なぜなら「その日、その時はだれも知らない」(マルコ二三・32)と、イエスは黙示的時間表の明解な分析をすすめなかったからである。またパウロも「兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません」(テサロニケ五・1)とエスカトンに関心を示さなかった。

キリストの支配が上から垂直的に介入するカイロイ「瞬間的時間」を見なければならぬだろう。「時は満ち、神のバシレイアは近づいた」(マルコ一・15)という宣言はカイロイである。「アルファでありオメガである」(黙示録一・

8、二一・6、二二・13)方は、永遠の昔からの先住性があり、父なる神と向かい合っていた。(ヨハネ一・1)⁽⁶³⁾。人性という肉を摂取し、永遠が時間に突入した(ヨハネ一・14)。新しいアイオンが始まったのである。

悔い改めて、福音を信じるための時が、エスカトンであろう。その瞬間に古い時が終わったのである。「わたしは神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神のバシレイアは ἐφάρσαεν ἐν τῷ ἵματι」(ルカー一・20)とすでに始まっている。「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」(コリント五・17)。キリストに似る者、栄光化し、完成する突破口への「時は満ちた」のである。

時間「カイロイとエスカトン」、空間「オーラム・ハツゼとオーラム・ハツバー」の黙示的二極相に対する弁明が必要である。大気中の窒素と酸素は、自然には混合しない。しかし、稲妻の介入によって、結合し、雨と共に大地を潤し、植物を生育している。光であるキリストにより、統一的理解が可能になる。

神の視点から、個は義であっても、実際的には厳然たる罪性がある。義人にして同時に罪人である(simul iustus et peccator)。罪の赦しを「今すでに」得ていても、罪性が「いまだなお」の中間の途上に生きている。しかし、聖霊は、先取り Prolapsis して王国を「受け継ぐ保証」(エフェソ一・14)を与えた。エスカトンというギリシャ語は成就の意をも含意している。キリストによる王国と義は「今すでに」歴史的な事柄 das historische を契機として機能している。その希望と喜びを告白するのが終末論的生き方である。

実際には罪人、しかし希望においては義人(peccator in re, iustus in spe)なのである。

自ら神の王国を樹立しようとする参与論的終末論では、罪ある存在から自由にはならない。異端は苦悩からの解放を主張するが、個人の罪性には重点をおかない傾向がある。救済が三元論的に死から不死、すなわち永遠の命こそが勝利とみなすからである。「ἐσχατος ἄνθρως」として、死が滅ぼされます。(コリント一五・26)に焦点を先鋭化す

る。罪からではなく、死からの救済に重点が移行してしまっている。裁きから無罪宣告を獲得できるのは、到来した神の宣告に依拠する。「今日、救いがこの家を訪れた」(ルカ一九・9)。罪を赦す、裁き主なる神の恩寵に依存している。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」(ヨハネ一・25)。父なる神による黙示思想的処罰は「今すでに」Jetzt schon、キリストの十字架で成就している。

したがって、終末的完成とは、以前に時間的にとらえていた局面ではなく、時間から解放された究極性を見つめ、救済の最終的決定的瞬間を味わうことである。「もはや彼らの罪と不法を思い出しはしない」(ヘブライ一〇・17)と永遠なる神は宣言する。ヒンドゥー教徒のように一元論的な見方で善悪双方を包含する神と解してはいけない。キリストは「新しい創造」といつ時を与える。再生者には未来永劫に、終わりのない終末意識を止揚する。

統一的コンプリヘンシブの見方を構築するとは、聖霊を通して同時性を味わうことである。Jetzt schon と noch nicht 義人と罪人、未来的終末論と実存論的終末論の二極の思惟を新しく調和させ統一するアウフヘーベンである。「キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、ご自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し」(エフェソ二・14)にあるように統一の概念を生起させる。義を宣告しつつつけているキリストを中心とする統一的コンプリヘンシブの視座を弁証する時、異端の人々の目からうつろいがとれるだろう。

注

(1) Wired magazine Erik Davis 二〇〇〇年四月五日。人工知能「ナノテクノロジーや遺伝子工学」を所持するロボットが人類

歴史を支配する主人になる可能性。

- 「地球白書」一九九六―九七、第一、三、五章、オーム社、茅陽一、一九九九年一月二九日。環境庁報道発表資料「化学物質と環境」概要版。オゾン層破壊、ダイオキシン汚染、環境ホルモン、PCBの処理などの環境汚染等。
- (2) 『至福千年』アンリ・フォション、みすず書房、一九八八年、三五頁。イランのゾロアスター教では、一万一千年の後に冬と夜がこの世に襲いかかってくると考えられる。その後、イマの王国からよみがえった死者たちが大地に降りきたって再び地上に満ちあふれるという。宇宙は、光と闇との二元論で構成されている。アーリマンがきよめの日に焼き尽くされる。アフラ・マツダの強く要望された支配が成就する前に最後の闘いがある。
- (3) 「宗教要覧」・一八―二一、六四―六五頁。『死海写本の謎を解く』E・M・クック、教文館、一九九五年、一五二頁。
- (4) 『新キリスト教事典』いのちのことは社、一九九一年、一七四頁。ユダ9節にはモーセの昇天から、14、15節にはエノクからの引用が見られる。また、ペテロ二・4も、エノクからの引用がなされ。
- (5) 『旧約聖書外典(下)』新見宏訳、講談社、一九九九年、一六三頁。『新共同訳』旧約続編エズラ記(ラテン語)四・26。Herman Ridderbos, *The Coming of the Kingdom*, Paladia Press, 1978, p.12-13.
- (7) 『聖書外典偽典5』旧約偽典、笈川博一・土岐健治訳、教文館、一九七六年、三、五頁。
- (8) 『新世界訳』(ものみの塔協会発行、一九八四年版)では「この事物の体制の神」と訳出。
- (9) 『旧約聖書外典(下)』同、一九九九年、一五五、一五六頁。参照『新共同訳』続編エズラ記(ラテン語)七・47。
- (10) エズラ記(ラテン語)七・32。参照『新共同訳』続編エズラ記(ラテン語)七・47。
- (11) *Palestinian Talmud Berakoth 17a*。参照『聖句』p.211-30。
- (12) *Theological Dictionary of the New Testament* Vol. IX, Eduard Lohse, Erdmans, 1974, p.471。
- (13) 『ギリシャ語新約聖書訳義事典』G・シュナイダー編、一九九三年、四二頁。『創世記』ヘブライ語聖書、対訳シリズ、ミルトス・ヘブライ文化研究所編、一九九二年、二五頁。楽しみ、よく潤された所。『現代ヘブライ語辞典』、キリ

- スト聖書塾 一九八四年 三四九頁 天国、来世、理想郷。
- (14) エズラ記(ラテン語) 八・52-53、『新共同訳』旧約続編。
- (15) 『ユダヤ終末論におけるキリシマの影響』T・F・グラッソン、新教出版社 一九八四年 一一〇-一二頁。ヘシオドス
の『仕事と日々』において、世界史の四つの継起する時代が、諸金属であらわされている。そしてそこに英雄時代が挿入
されているが、これは、いかなる物質にも結びつけられていない。四つの金属は、金、銀、青銅、鉄である。さてダニエ
ル二章においても、世界史は四つの金属、金、銀、青銅、鉄であらわされている。第四の時期の後期の状態は鉄と粘土の
混合だといわれている。
- (16) *Theological Dictionary of the New Testament* Vol.1 K.G.Kuhn Eerdmans 1977 p.573. 『キチナル新約聖書神学辞典』王・王国、
K・G・クーン、教文館 一九六五年 二二頁。
- (17) Herman Ridderbos, *The Coming of the Kingdom*, Paideia Press 1978 p.16. 『キチナル新約聖書神学辞典』王・王国』同、一五頁。
A Greek-English Lexicon of the New Testament and Other Early Christian Literature W. Bauer/ W. F. Arant/ F. W. Gingrich Chicago 1979
p.134-136.
- (18) 『死海文書のすべて』J・C・ヴァンダーカム、青土社 一九九七年 一五九-一七五頁。
- (19) ダニエル二・4 『旧約聖書』関根正雄訳 一九九七年。
- (20) 拙論『旧約』誌 No.10 一九九八年 二頁。
- (21) *Ante-nicene Fathers* Vol.3 Tertullian Against Marcion Book IV Hendrickson 1994 p.409.
- (22) Christopher R. Seitz, *Word without End: the Old Testament as abiding theological witness*, Eerdmans 1998 p.226-227.
- (23) H.L.Strack-P.Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch* III, 1965 p.824. 『ユダヤのエルエゼル・ハン・
ヒルカノスが、エジプト在住が四百年』土師時代の異邦人支配が百十一年、バビロン捕囚からエルサレム陥落までが四百
九十年、合計約千年と計算。
- (24) 第四エズラ書七・28 『旧約聖書外典(下)』同 一五三頁。シリア語バルク黙示録四〇・3 『聖書外典偽典』五』同、一
頁。
- (25) 拙稿「ものみの塔の超ファンダメンタリズムからの回帰」福音主義神学会・西部部会・組織神学部門、一九九九年、四、
五頁の論者参照。「目録」誌 No.11 異端とは 市川康則、一九九八年、九頁。
- (26) 『終末と救済の幻想』ロバート・D・リフトン、岩波書店 二〇〇一年 二八八-二九五頁。
- (27) 『異端の歴史』D・クリステイ・マレイ、教文館、一九九七年、五一-五六頁。一五六年頃から聖霊充滿のカリスマ的感
激を期待し、厳格な道徳主義を実践した。新しいエルサレムがフリユギアのペプーザに実現することを信じていた。既存
の教会の位階制度を否定したグループである。徹底的な弾圧により五世紀頃に消滅。
- (28) *The Four Great Heresies* J.W.C.Wand London 1967 p.13.
- (29) 『新カトリック大事典』研究社 一九九六年 四七五頁。二〇〇一年三月二日にバチカンでヨハネ・パウロ二世は
「誤った信念のもとに行なわれた異端裁判や宗教戦争」に対する謝罪を発信した。教会は「異端」に対応する際、慎重でな
ければならぬ。Orthodoxy (正統信仰)とOrthopraxis (正統的信仰生活)は必ずしも一致しないからである。参考: *Was ist
Heresie?* K.Rahner Schriften zu Theologie 5 Köln, Zürich 1962 S.527-76.
- (30) マルティン・ルター対トマス・ミンツァー、ジャン・カルヴァン対ミカエル・セルヴェトス、改革派教会対アルミニウ
ス主義において相手を異端と糾弾する主導権争いの構図がある。ローマ・カトリック教会から見れば、プロテスタント教
会が異端である。拙稿「ものみの塔の超ファンダメンタリズムからの回帰」同、四頁の論者参照。
- (31) 『アウヴスティアヌス著作集15』『神の国』(5) 教文館、一九八三年 一一五頁。
Christ's Second Coming Will It Be Perilous? David Brown Still Waters Revival Books 1990 p.62.
- (32) 拙論「目」誌 No.14、一九九九年、一〇-一一頁。
- (33) 『オリゲネス4』ケルソス駁論、キリスト教父著作集、教文館、一九九七年、一五四頁。

- (35) *Expositiones XIII Epistularum Sancti Pauli*. A.Souter, *Paulinus's Expositions of Thirteen Epistles of St.Paul* J.A.Robinson Cambridge 1926 p.367.
- (36) 「レムティリアスへの手紙」第二章『アウグスティヌス著作集』ヘレキウス派駁論集(1) 教文館一九七九年 三四頁。
The Day-Star [reprint of 1846] O.R.L.Crosier *Leaves-Of-Autumn Books* 1990 p.13-20 『終末・預言・安息日』村上良夫、新教出版社、一九九八年、二一〇―二二二頁。サタンは神の統治が不当だと主張。サタンの主張を反駁することがキリストの働きであり、キリストの名を持つすべての者の働きである。それから終わりが来る。神は自分の律法の正しさを立証し、その民を救われる。拙論「旧約」誌 No.17 一九九九年 四頁。
- (37) *Purging the Poison: the Revision of Pelagius' Pauline Commentaries* Casiodorus and his Students D.W.Johnson Princeton 1989.
- (38) 『アウグスティヌス著作集』ヘレキウス派駁論集(2) 教文館、一九八五年、五六頁。
- (39) *Expositiones XIII Epistularum* p.47. アダムは罪の型を作ったに過ぎない。しかしキリストは無償で罪を赦し、しかも義の模範を与えた。
- (40) 『二元論の復権』グノーシス宗教とマニ教 S・ペトルマン、教文館、一九八五年、三二頁。
- (41) ミアキム「一三〇頃―二〇二」はイタリアのフィオーレデ、*Expositio in Apocalypsin*「黙示録注解」を著わし、中世の終末論に影響を与えた。二二六〇年に「聖霊の時代」が到来したと注解。アウグスティヌスの「神の国」と教会を同一視する伝統的理解に決別を告げ、清貧運動と結び付いた。フランシスコ会の終末論が継承していった。
- (42) ルカ六・20。
- (43) *Luthers Werke in Auswahl* III Otto Clemen Bonn 1912-1933 *ebd.* Bd. II S.382. 『ドイツ宗教改革』渡辺茂、聖文舎、一九七八年、七十七―七八頁。この世のはじめから賢明な君主は珍しい鳥である。敬虔な君主はなおさらそうである。彼らは大部分地上で最大の愚者があるいは最大の悪漢である。だから、われわれはいつも彼らから最悪のことを予期しなければならぬ。AaO I S.383: 同七八頁。暴君たちはマイゼン、バイエルン、フランケンブルクその他でわたしの新約聖書を、あちこちからの官庁に引き渡すよう命じた。その場合、家屋に侵入して、書物や財産、その他のものを腕力を振って奪えと命令するならば、われわれはこれを甘受しなければならない。不法に抵抗しないでこれを耐え忍ばなければならない。
- (44) *Weimarer Ausgabe* D.Martin Luthers Werke *Kritische Gesamtausgabe* 1883 S.294. 『ルター著作集』第一集6、聖文舎、一九八一年、三一九頁。あなたがたは神のつじつた怒りの原因となっているのであるから、早晚その生活態度を改めないかぎり、あなたがたの上にも神の怒りが加えられることは必然である。
- (45) *Schriften und Briefe. Kritische Gesamtausgabe*, hrsg.v.Günther Franz, Gütersloher Verlagshaus Gerd Mohn, Thomas Mintzer 1968 S.329. 『ルター神学とその社会教説の基礎構造』倉松功、創文社、一九七七年、四七頁。
- (46) AaO S.221-222: 同四六九―四七七頁。義認を経験した者は律法を厳しく語る。そうでない説教は、蜜のように甘い神の言葉であり、それは見かけは美しいが毒である。律法によって、人は神に似、キリストに似たものとなるのである。
- (47) マインド・コントロールの語は、元統一協会のステイヴン・ハッサンによって広まった。反社会的な経済詐欺行為などを平気とする宗教団体に適用する場合が多い。社会学の立場からは特定のグループをマインド・コントロールとステレオタイプ化し、魔女狩りのように同一視する問題性も指摘されている。「信者が『世代』を語る時 『エホバの証人』の布教活動に現われたカテゴリー化実践の分析」『宗教と社会』兼子一、一九九九年、第五卷三九―五九頁。
- (48) 『旧約聖書外典(下)』新見宏訳、講談社、一九九九年、一八八頁。『新共同訳』続編エズラ記(ラテン語) 二二・7。
『キリストと時』O・クルマン、岩波現代叢書、一九五四年、六九―七〇頁。クルマンはエレミアス、キエヌメルと同様救済史の角度から「現在の・未来的終末論」を掲げた。Jetzt schon! noch nichtの緊張関係を言及し、ブルトマンの実存的終末論を論駁している。
- (49) Bradford Young, *Thy Kingdom Come* part 1 Jerusalem Perspective, Sep.1988 p.1.
- (50) J.H.Bavinck, *Inleiding in zendingwetenschap*, Kampen 1954 p.157.
- (51) H.L.Strack und P.Billerbeck, *Kommentar zum Neuen Testament aus Talmud und Midrasch*, 4Bde, München 1956 S.176-178.

- (54) *The Old Jewish-Aramaic Prayer: The Kaddish*. Leipzig, 1909. p.21-24.
- (55) 『マタイによる福音書』・1、EKX新約聖書註解、ウルリヒ・ルツ、教文館、一九九一年、四九一頁。
- (56) マタイ六・9 『新約聖書』ウイリアム・M・ギャロット、角川文庫、一九九九年、二九頁。『共同訳』日本聖書協会、一九七八年版。あなたの支配を行き渡らせてくださいますように。
- (57) 『教義学』「創造論」・3、カール・バルト、新教出版社、一九七四年、四二二頁。バルトは歴史の永遠と時間を鳥瞰図法のように絶対的観点から考察する。現実的な終末史については、あらゆる時にいつもその都度「終わり」に近い!』と、いわねばならないであろう。『カール・バルト著作集』15、新教出版社、一九八一年、九五頁。超越的な神が突如として上から突入することを弁証する。
- (58) 『タルムード入門』A・コーヘン、教文館、一九九七年、一四四―一四五頁。
- (59) *Synonyms of the Old Testament*. R.B. Girdlestone. Erdmans, 1897. p.166. マルトはゼロ・ルカは一度だけ、ヨハネは一回、マタイは八回、パウロは書簡に六十六回用いた。
- (60) W. Gesenius, *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*, 1975. p.842. 『旧約聖書へブル語大辞典』、名尾耕作、聖文舎、一九八二年、一―四五頁。
- (61) アルベルト・シユヴァイツァーは、イエスの終末論がユダヤ黙示思想によって規定されていることを論及。個人的な終末論 *eschatologia individualis* の肉面的な不死ではなく、近い将来に待ち受ける世界的出来事であると、神の国の到来を徹底させるための「徹底的終末論」 *Konsequente Eschatologie* を唱えた。ヨハンネス・ヴァイスの「超越的な終末論」から派生した。
- (62) 『フルトマン著作集』14、新教出版社、一九八三年、一三二頁。歴史の意味は時の終わりにやっと成就するのではない。そうではなく、人間が今、イエス・キリストにおいて現われた神の恩寵をつかみとり、そのことによって新しい人間となるとき、そのつど人間の生活のうちに成就するのである。バルトと同様に、黙示思想に基づく歴史的未來の視点を否定する。究極的に、永遠の命を受け取るカイロスと、審判を受ける危機のエスカトンとは自己の決断による時を実存的終末論

として展開する。六十年代以降になると、パネンベルクが、人類の進化進歩「創造」と終末の神の王国「和解」が回復によって重なることを展望し、普遍史を啓示の舞台と主張する。一方、モルトマンは『希望の神学』(新教出版社、一九六八年)の中で、ヘーゲルの歴史の過程を目的論的にとらえ、社会倫理への影響に参与するように歴史回復へ私たちを向けていく。

- (63) 拙論「目薬」誌No21「キリストとはだれか3」、二〇一一年、一二―一三頁。

(神戸聖書宣教学校・校長)